

付託第1号

請願書等の付託について

那須烏山市議会会議規則（平成17年10月那須烏山市議会規則第1号）第14条の規定により、令和6年第2回那須烏山市議会6月定例会において、次のとおり請願書等を付託する。

令和6年5月30日

那須烏山市議会議長 渋井由放

審査期限		休会中に審査し本会期中に報告すること。	
付託委員会	番号	件名	備考
総務企画 常任委員会	陳情書 第2号	那須烏山市名誉市民に ついて	

陳 情 書

那須烏山市名誉市民について



1 陳情の要旨

故川俣英夫氏が今年没後百年を迎え、那須烏山市の医療・教育・行政において、多くの功績を残し、市勢の発展に尽くされた。このことを後世の人たちに伝えるべく、那須烏山市名誉市民として推挙して頂くよう陳情する。

2 陳情の理由

故川俣英夫氏の功績を知る那須烏山市民が少なくなっており、この機に同氏を名誉市民にして頂きたいをお願いします。主な功績は以下に記します。

① 医療について

明治11年、東京帝国大学医学部別科入学

明治14年、医術開業試験合格

明治18年、警視庁雇検疫医から警察医となる

警視庁勤務時に、旧会津藩士の方々と交友関係を築く

明治23年、警視庁を依願退職し、郷里烏山で川俣医院を開業

医師として「万民公平」の観点から、貧困者の積極的治療を行う。

また、「人を作るは百年の大計なり」との見地のもとに、医師、看

護師、薬剤師を養成し、あるいは学費を給付して遊学させ、地域医療に貢献した。

明治30年5月、那須郡医会長歴任する。

② 教育について

地域教育の重要性を考え、明治32年、旧制中学校設立のため、栃木県議会議員に当選。県立中学校の設立請願をするが、却下される。当時の明治政府からは設立の許可は得ているが、その後、数度にわたり栃木県に設置（私立中学校の設立も含めて）を願い出るが、いずれも断られる。

その後、私財を投じて、明治40年に「各種学校」扱いの私立烏山学館を創立する。学校の設立・運営の仕方については、下野中学校（現作新学院）の設立者である船田兵吾氏の助言などを受けながら、同校との校友関係を築き上げた。学校運営費については、私財を投じて、地域の有志からの寄付金からも運営されていた。

明治44年、私立中学校として認められ、私立烏山中学校となる。初代校長に警視庁勤務時代の交友から中根明氏を推薦され、招聘する。

中学校の教員養成所を付設する。

烏山文庫の設置。

大正13年1月、川俣英夫氏死去。

大正14年4月、川俣英夫氏が悲願だった栃木県立烏山中学校となる。この間、私財を投じ学校を守り続けた。

初代校長の中根明氏は、大正14年3月私立烏山中学校を退職し、当時、下野中学校において、事務員による生徒が徴兵忌避するために卒業証書が改ざんされていたことが発覚し、学校の運営危機を生じていた下野中学校に校長として赴任し、その後、学校の運営危機を乗り越えた。この件においては、川俣英夫氏は中根氏を初代校長として招聘したことは那須烏山市だけではなく、結果的に、栃木県の教育においても貢献があったと評価されても良いと思われる。

③ 行政について

明治31年、烏山町議会議員

明治32年、栃木県議会議員

明治38年9月から明治39年6月、烏山町長

大正3年7月から大正13年1月23日、烏山町長

死去するまで町長を歴任した。

県議時代には、地域の為に中学校の設立に奔走した。

烏山町長時代には、烏山町民の悲願であった烏山線を開通させるために心血を注いだ。開通を見届け翌年死去。

上記のように、故川俣英夫氏は地域の人たちのために、何をしたら良いか考え、信念を持ち、そのために自分の私財を投じてまで、医療・教育・行政に貢献しました。また、善行を行おうとすると、妨害をしようとする者がいたが、それにも動じず信念を貫きました。

このような人物は那須烏山市において、後先におらず、その信念は後世の人たちにも語り継がれるべき人物だと思い陳情させて頂きます。

参考資料として

- ① 那須烏山市教育委員会が子供たちに出している教本の故川俣英夫氏に関するもの。
- ② SNSにおいて、川俣英夫氏と中根明氏に関して調べて載せて

いるもの。

上記2点を提出します。

地方自治法第124条の規定により、上記のとおり陳情書を提出します。

令和6年5月14日

住所

氏名



那須烏山市議会議長 渋井 由放 様